

現代世界における「コミュニティ」の問題（訂正版）

— 室井遥講演報告「宇野経済学とポランニー」に対する問題提起 —

田中裕之

カール・ポランニーの最大の問題提起は、人類史上のコミュニティの地位とその内部編成であろう。室井遥氏の報告「国家から地域へ」（スライド 52）では、現代資本主義において、「コミュニティの帰属とセーフティネットの構築」を「実現している主体」は、「福祉国家」ではなく、「小規模な地域共同体」であると述べられている。つまり、社会の基礎単位であるコミュニティは、地域社会の家族、そして職場・学校等の小集団を基盤とする。

だが、フランスの人口学者、人類学者のエマニュエル・トッド氏は、家族システム、階層構造は、現代世界におけるグローバリゼーションの衰退という問題に対して歴史的变化に直面していることを強調している。（『グローバリズム以後』）

したがって、資本主義の世界編成の現局面をふまえ、コミュニティの現代的意味をとらえる上で、以下の三点を提示したい。

① 歴史的到達点として現在の意味

伊藤誠先生が提起された点は、「経済生活の一般的規定も、その特殊の形態規定とともに経済学によってはじめてあきらかにされる。」『マルクス経済学の方法と現代世界』（桜井書店 p114—p116）によって、「実体的」（マルクス、ポランニー）な「経済生活」の一般的規定は、特殊歴史的な資本主義の歴史的到達点としての現在から、世界編成の内部関係をとらえるべきではないか、という問題となる。

② $G-W-G'$ の運動の組織原理

資本の組織原理は、貨幣収支体としての維持・再生産を条件としており（『資本論』第二部）、時間的・空間的に異なる価格体系を基盤として（同第一部「貨幣の資本への転化」）、世界市場と国内市場を編成・組織する。社会の基礎単位のコミュニティに対して、外側の編成原理、あるいはコミュニティ間を結合して再編成する原理ではないか。

③ コミュニティのネットワークの新しい問題

21 世紀に入った資本主義の世界編成の現状は、中国がアジアシステムという膨大なモノの生産・物流・貿易のセンターとなり、その資源消費を世界的に倍以上に押し上げ、世界が抱える環境負荷を倍加している。資本はその問題に技術面で最大限に取り組みざるを得ないが、新しい NPO、NGO のコミュニティ組織が、その担い手として登場している。その評価はどうなるか？（五味久壽先生の提起）

また現局面の生産力の技術的特徴は、一方で産業再編上、製造業の製造・物流過程の「自動化」である。他方で日常生活支援の協調型、対話型のロボット登場により、人間の脳の情報伝達（脳の神経細胞間の電気反応）を基礎とした情報処理技術によって、人間の集団労働と思考、認知等のコミュニケーション活動の意味が提起され、経済学を超える生物学、人類学・考古学、認知心理学の見地が重要になっている。更に動物のコミュニティの最

新の研究、群れ・言語・認知等により、人類の進化と生物多様性の課題が提起されている。